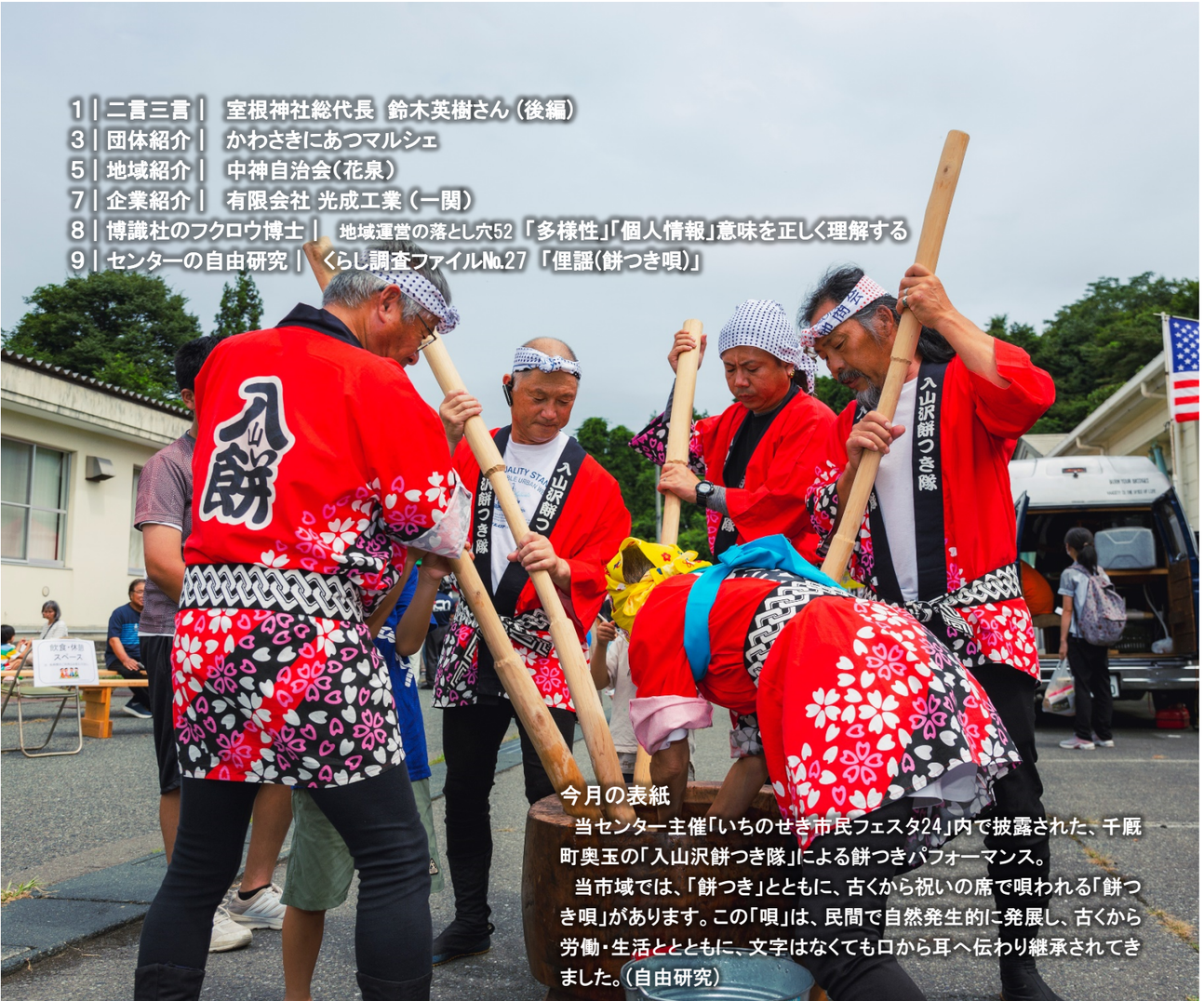
# idea

ニュースレター「イデア」

2024.11

NPO・地域・企業・行政の情報発信により、
「アイデア」と「であい」の機会を創ります。


1｜二言三言｜　室根神社総代長　鈴木英樹さん（後編）
3｜団体紹介｜　かわさきにあつマルシェ
5｜地域紹介｜　中神自治会（花泉）
7｜企業紹介｜　有限会社 光成工業（一関）
8｜博識杜のフクロウ博士｜　地域運営の落とし穴52「多様性」「個人情報」意味を正しく理解する
9｜センターの自由研究｜　くらし調査ファイルNo.27「俚謡（餅つき唄）」


**今月の表紙**

当センター主催「いちのせき市民フェスタ24」内で披露された、千厩町奥玉の「入山沢餅つき隊」による餅つきパフォーマンス。

当市域では、「餅つき」とともに、古くから祝いの席で唄われる「餅つき唄」があります。この「唄」は、民間で自然発生的に発展し、古くから労働・生活とともに、文字はなくても口から耳へ伝わり継承されてきました。（自由研究）


idea

発行　いちのせき市民活動センター　せんまやサテライト
〒021-0881　一関市大町4-29 なのはなプラザ4F　Tel 0191-26-6400　Fax 0191-26-6415
〒029-0803　一関市千厩町千厩字町149　Tel 0191-48-3735　Fax 0191-48-3736
ホームページ：https://www/center-i.org/　メール：center-i@tempo.ocn.ne.jp


# おしらせ

**イベント**

## 世界を知ろう！ ～音楽でつなぐ 心の輪～

一関市国際交流協会では、音楽を通じて海外の文化や習慣を学び、国際理解を深めることを目的に、下記日程で「世界を知ろう！～音楽でつなぐ心の輪～」を開催します。ゴスペルやヒップホップなどを歌うグループ「HEY!WAO!」のメンバーがパワフルな歌とダンスを披露します。詳しくは下記まで。

**日時**：2024年11月23日（祝・土）
**時間**：〈開場〉13時15分 〈開演〉14時
**場所**：一関文化センター 中ホール
**チケット料金**：1,000円／人（中学生以下無料）
※チケットと入場整理券は一関市国際交流協会（一関市大町4-29 なのはなプラザ4階）で配布しています。
**問合**：0191-34-4711
（一関市国際交流協会）

**イベント**

## 中津谷川イルミネーション

室根町津谷川地区の中津谷川地内では、今年も下記日程で「中津谷川イルミネーション同好会」によるイルミネーション点灯行事を実施します。

平成22年に地元有志2人で始めたイルミネーションですが、年々参加世帯が増加。旧津谷川小学校を起点に約600mの区間で、趣向を凝らしたイルミネーションをお楽しみいただけます。

**点灯期間**：2024年11月23日（祝・土）～2025年1月7日（火）
**点灯時間**：16時30分～21時頃
**場所**：室根町津谷川字本宿周辺
※旧津谷川小学校を目指す
**問合**：0191-65-2525
（事務局・佐藤好彦）

**募集**

## 「mi×ÜDance」キッズクラス生徒募集中

3歳～小学生を対象に、ストレッチや筋トレ、バーレッスン、アイソレーションなどのフロア運動等、モダンバレエの基礎や表現の練習を行っている「mi×ÜDance（みゆうだんす）」では、生徒を募集しています（性別、居住地不問）。また、親子レクや保育園、学校などでのダンスレッスン（講師派遣）にも対応しています。詳しくは下記まで。

**活動日時・場所**：
〈土曜日〉10時～11時30分　宮坂集会所
〈月曜日〉18時～19時　一関市川崎市民センター
※活動日や場所等は変更になる場合があります。
**月謝**：4,500円（会場費は別途）
**問合**：miudancemiu@gmail.com
（代表・阿部）

**イベント**

## 第36回 曽慶地区芸能祭

大東町曽慶地区の恒例行事である「曽慶地区芸能祭」を下記日程で開催します。コロナ禍を経て昨年新たな形でスタートした同芸能祭ですが、今年は各自治会等の趣向を凝らした演目や生涯学習団体による日頃の活動成果発表のほか、特別出演として混声合唱団「Prova」による合唱、一関市立曽慶保育園の園児によるダンス披露、お楽しみ抽選会などを行います。詳しくは下記まで。

**開催日時**：2024年11月24日（日）12時30分～16時
**場所**：大東曽慶地区センター
（一関市大東町曽慶神薗32-1）
**入場料**：無料
**問合**：0191-75-2244
（一関市曽慶市民センター内）

**講座**

## 自治会長サミット Vol.19

自治会や民区、集落公民館など、地縁活動を担う組織の三役レベルのみなさんに向けた情報交換の場「自治会長サミット」。今回は、顔の見える範囲で「共助」の仕組みをつくる「第13区自治会（室根町釘子）」、水口公園を中心に交流の機会を紡ぎ続ける「水口民区（一関市滝沢）」が事例発表します。完全申込制（11月28日締切）。詳しくは下記まで。

**開催日**：2024年12月6日（金）
**時間**：17時～19時
**場所**：一関市川崎市民センター
（川崎町薄衣字諏訪前7-1）
**参加料**：無料
**問合＆申込**：0191-26-6400
（いちのせき市民活動センター）

**イベント**

## 「イチコレ2024」開催のお知らせ

‘モデルが主役’のファッションショー「いちのせき市民モデルコレクション（通称：イチコレ）」。開催11年目にあたる今年は、「イチコレ第5回コンテスト」をメインに、小学4年生～中学生が手作りの衣装で登場する「イチコレSchool」のショーのほか、飲食や物販等も企画しています。詳しくは下記まで。

**開催日**：2024年11月24日（日）
**時間**：〈全体〉10時30分～13時30分
〈ショー〉11時30分～12時30分
**場所**：なのはなプラザ2階
にぎわい創造センター
**入場料**：無料
**問合**：0191-26-6400
（いちのせき市民活動センター）

## まちの写真展

スタッフがまちの１コマを切り取ります。

作品名「ひまわり畑から出発！」

千厩町千厩の「ひまわり畑」に突如現れた乗り物のオブジェ。このオブジェは、千厩地区まちづくり協議会産業安全部と、千厩小学校、一関清明支援小・中学部、千厩高校が共同で制作したもので、ひまわりが満開の時期はフォトスポットとして賑わいました。

## 旧町村別の人口動態等を共有します。

2024年10月1日付
（2024年９月30日現在住民基本台帳より）
※外国人登録者含む

| 一関市全体 | | 前月比 |
|---|---|---|
| 人口 | 105947 | -132 |
| 世帯数 | 46314 | -30 |
| 出生数 | 45 | 13 |

| | 人口 | 前月比 | 世帯数 | 前月比 |
|---|---|---|---|---|
| 一関 | 53327 | -64 | 24609 | -10 |
| 花泉 | 11639 | -9 | 4668 | -4 |
| 川崎 | 3154 | -17 | 1263 | -4 |
| 千厩 | 9504 | -12 | 4077 | -2 |
| 大東 | 11469 | -16 | 4839 | -10 |
| 東山 | 5705 | -1 | 2269 | 2 |
| 室根 | 4251 | -5 | 1798 | -2 |
| 藤沢 | 6898 | -8 | 2791 | 0 |

本宮・新宮神輿の先着争いが行われてきた８ｍの御仮宮。今回からは４ｍに下げられた（写真は平成30年のもの）。

181 /105,947

室根神社総代長（１期３年目）。定年で地元に帰郷した平成25年から総代となり、令和４年より総代長へ（※）。室根地域防犯協会会長や室根まちづくり協議会理事等、地域の各種役を担うほか、保護司としても活動中。昭和26年室根町折壁生まれ（在住）。

※旧折壁村を７区に分け、各区から３人ずつ総代を選出。１期３年で、総代の互選で総代長を選出する。

第123回　室根神社総代長　鈴木英樹　×　いちのせき市民活動センター　センター長　小野寺浩樹

# 「世襲制」のプライドと難しさ
## ～「室根神社特別大祭」のイマとこれから【後編】～

**閏年の翌年に行われる国の重要無形民俗文化財「室根神社特別大祭」（以下「特別大祭」）」は、世襲制の「神役」によって1300年以上も続けられてきたとされています。しかし、少子高齢化による世襲制の限界もあり、少しずつその形態は変わり始めています。今年6年ぶりに開催されたこの祭りの現状と今後について、客観的に見つめてみました（2回シリーズの後編）。**

**小野寺**　前回、総代として長年関わる立場の鈴木さんでも、何が行われているか分からない祭礼部分があるというお話がありました。実際、特別大祭の３日間はどのようにして祭礼が進むんですか？

**鈴木**　例えば我々総代関係者は、前日から様々な祭事が始まりますが、仮社務所と本殿で同時に行われるものも多いです。同様に、同時進行で各神役がそれぞれの役目で動き出すので、誰かが全体指示を出すようなことはありません。

**小野寺**　神役や総代として長年関わっている人でも、基本的には自分の持ち場、役割についてしか分からないということ？

**鈴木**　そう。かつ、基本は口伝であり、代替わりして初めて覚えることなので、例えば急に前任者（父親等）が亡くなった……となれば、大変です。補佐する人はいても、細かな所作などは難しいものがありますよね。

**小野寺**　その昔の人なら作法として自然にできるような動きが、現代人には難しかったりしますしね。口伝だけでは難しい……。

**鈴木**　口伝の場合、１回曲がってしまうと、曲がったままになってしまうんです。「本来はそうじゃないのでは？」と指摘しても「いや、前回はこうしていたから」と、曲がったままが「当たり前」になっていく。

**小野寺**　なるほど……。全体責任者のような人がいないとそうなってしまいますよね。

**鈴木**　当時の序列に則れば、本宮の大先司がその立場にあるわけですが、それぞれの役の中で世代交代が行われるので、どうしても今の人間関係も影響してしまいますよね。序列では上の神役であっても、世代交代したばかりでは先輩方の方が経験がある（笑）本当は自分たちの立場や立ち位置をもっと理解しなければいけないんだと思います。

**小野寺**　世襲する際に、そうした「格」も伝わっていなきゃいけないということですよね。

**鈴木**　それから、口伝でしっかり伝わっていたとしても、時代や生活様式の変化で継承が難しくなってきた部分もあります。例えば「御仮宮」の造営。これも細かな分業制で、やはり世襲制なのですが、部材の調達が大変になってきています。御柱（松）は神社が、横柱（栗）は田茂木集落が準備しますが、昔は集落の人員で行っていた切り出しも、今は森林組合等に委託しているようです。

**小野寺**　委託となると、金銭的負担が発生しますよね？

**鈴木**　なので、集落が各戸から徴収する額が増えたりするわけです。また、安全面でも時代の流れがあり、これまでの御仮宮は８ｍの高さに造営していたんですが、造営を担当する集落の後継世代から「けが人をだしたくない」という声があり、集落内で検討した結果、高さを４ｍに下げると決めたそうです。

**小野寺**　時代に合わせて柔軟にはなっているんですね。

**鈴木**　文化財指定になっているので、国にも確認した結果、問題ないとのこと。きっと文化財指定の要因はやはり「世襲制」の部分なんでしょうね。

**小野寺**　そうやって時代に合わせた対応をするにあたって会議などがあるんですか？

**鈴木**　会議は2回しかありません。１回目の会議は「開催するか否か」で、開催するとなれば、２回目は各種神役や関係者を集めた70人規模の顔合わせ会であり、特別大祭斎行の共通認識の確認をする会議でもあります。そうするとそこから各神役や各保存会ならびに各地区が準備を進める。なので基本的には各神役、役割をもった人々・組織に様々な判断が委ねられています。

**小野寺**　それぞれの役割を持った人が特別大祭の時には集まってくる……という感じですね。

**鈴木**　そう、その結果、警察に道路使用許可を取るときに、責任者は誰かと問われるんですが「いない」のが実際。でもそれでは許可がとれないので、総代長を申請者にして申請していますが、責任者という意味合いが違うんですよね（笑）

**小野寺**　大変でしょうけど、いざ始めるとなると自然発生的に動き出す祭りというのは、すごく興味深いです（笑）

**鈴木**　全国的にも珍しい特殊なお祭りなんです。でも故に、いざ総代となった時に、自分がどういう動きをしたら良いか分からないし、法被を着ていて、見に来た人に特別大祭の歴史等を聞かれて十分に説明できないことを発信されたりしたら……と思うと怖いです。なので我々総代こそしっかり勉強しないといけないんです。

**小野寺**　地元の人でも特別大祭の謂れを語ることができなくなっているんですね。

**鈴木**　小学校等でも一応特別大祭に関する学習はあるようですが、深夜や朝に行われる祭事も多いので、子どもたちはもちろん、地域住民も実際に見る部分は限られていて、全体像の理解は難しいんでしょうね。

**小野寺**　「室根神社特別大祭」の場合、室根と言いながら、千厩や大東、気仙沼や大船渡など、複数地域に神役や関係者がいますし、もっと広域で興味関心を持つ取組が必要なのかもしれません。

**鈴木**　そうですね、今後人口減少により関係者が減ると、山から神輿を降ろすことも難しくなりますし、担ぎ手の確保が不可欠かと思います。根本的な歴史背景の理解促進は必要ですね。ただそうした理解促進を促す役割の人も少ない、というのが辛いところです。

**小野寺**　特別大祭という存在は知っていても、これだけ特別な形で成り立っている、継承されているということは知りませんでした。せめてこうした外部からの発信で知ってもらい、見に来てくれる人を増やすことで、必死に世襲してきた神役さんたちには誇りとプライドを持ってもらいたいですね。

※１　指定を受けたのは「室根神社祭のマツリバ行事」。なお、閏年の翌年に行う祭事が「室根神社特別大祭」であり、いわゆる「例祭」は毎年開催している。

※２　令和６年10月25日～27日の３日間開催

# ノリと勢いと地元『愛』を忘れずに

## かわさきにあつマルシェ

**かわさきにあつマルシェ**
「川崎地域を盛り上げたい」「若い人たちが集まれる場所をつくりたい」という思いからハンドメイド作家らを中心に令和３年11月に発足し、令和４年３月に「かわさきにあつマルシェ（通称：かわマル）」に改称。現在の会員は14名。

※お問い合わせは「かわマル」が運営しているInstagramアカウント「かわさきにあつマルシェ（@kawamaru284）」へ

写真：「令和３年度川崎文化祭」での集合写真

### 熱い想いで、活動は緩く

「川崎でなんかしたいねー」と何気ない会話から少しずつ、「川崎地域を盛り上げたい」「若い人たちが集まれる場所をつくりたい」という思いへと変化していったと話すのは、パワーストーンアクセサリーや編み物雑貨などのハンドメイド作家「よこまち」の小野寺純子さんと泉田彩さんです。

二人は「特に決めたことをするのではなく、ゆるい感じで何かしたい」と考え、それを具体的な形にするため、地元の一関市川崎市民センターへ相談に行きました。相談を重ねながら機会を窺うものの、なかなか進展せず半ば諦めかけたとき、「令和３年度の川崎文化祭で若者を集めたいので出店してみないですか？」という打診が同市民センターからあり、「これは絶好のチャンス！」と考えた二人は、「よこまち」としての出店を即決。さらに、「地域を盛り上げてくれる人が一人でも多く増えるように」と知り合いのハンドメイド作家などへ呼びかけたところ、６店舗が小野寺さんらの思いに共感し、一緒に出店することに。泉田さんは、「出店者のほとんどが、川崎在住の人、子どもが同級生など、川崎に所縁のある人たちで驚きました。想いを言葉にするのは大事だなと改めて実感しました」と笑顔で話します。

### 人と人とのつながりで発展

令和３年11月、文化祭への出店をきっかけに、「川崎にこれだけパワーを持っている人たちがいるなら自分たちでもイベントができそうじゃない!?」と小野寺さんと泉田さん、出店メンバーは奮起し、文化祭でお揃いで付けていたターバンから由来して「ターバン女子会」を８人で結成しました。「メンバーのほとんどがクラフト作家をしながら家事や育児をする女性が中心だったため、出来る範囲で無理なくできることを心掛けた」と小野寺さんは語り、どのような運営をしていくかを模索し続けたと言います。さらに、人づてで女子会の存在を知った人たちがメンバーに加わるなど、少しずつ活動の認知も広まっていきました。

そして、令和４年３月に独自イベントを開催することを決定し、イベント名を考えていく中で生まれたのが「かわさきにあつマルシェ（以下「かわマル」）」でした。同時に団体名も同イベント名に改称し、小野寺さんが代表、泉田さんが事務局と、体制も整えました。しかし、イベントの開催に向けた準備が進められる中、新型コロナウイルス感染症が流行。感染予防の観点からイベントを延期にせざるを得なくなりました。小野寺さんは、「せっかくイベント名を決めて『これから』というときに、まさかの出来事でした」と話し、厳しい状況下でありながらも、メンバーとの連絡は取り続け、各メンバーの得意なことや知識などを活かし、かわマルのロゴやパンフレット制作、他団体のイベント運営の情報収集等を行うなど、活動の歩みを止めませんでした。

コロナ禍の延期を経て、令和５年６月、「第１回かわさきにあつマルシェ」を開催（「令和５年度元気な地域づくり事業」の一環）。買い物客や観光客が集まる道の駅かわさきを会場に、メンバーそれぞれが制作した布小物やアクセサリー、クラフトバックなどの展示・販売のほか、メイクやリンパ整体等を行う９店舗が出店しました。

小野寺さんは、「自主的な開催は初めてで緊張しましたが、お客さんと触れ合い、交流することができ、たくさんの人に、地元に根付いた活動であるということを伝えることができました」と笑顔で話します。

### 『愛』を大切に自分たちも楽しむ

第１回の開催をきっかけに、かわさき夜市やせんまやひなまつりへの出張出店などの依頼があり、他地域との交流にもつなげている「かわマル」は、令和６年10月までに計５回の自主イベントを開催しました。「自分たちの想いや活動を知ってもらい、広がることで、川崎にもこんな活動をしている人たちがいるということが伝わるのは嬉しいです。かわマルの素敵なところは、とにかく明るく、いつも笑顔が絶えないことです。そして、地元『愛』が強いことです」と小野寺さんは話します。

「川崎地域を盛り上げたい」「若い人たちが集まれる場所を…

### Q.あなたにとって「かわマル」とは？

**代表**

A. 出会いの場

おのでら　じゅんこ
**小野寺　純子さん**
川崎町在住。発足時からのメンバーで、ハンドメイド作家「よこまち」としても活躍中。みんなで楽しく話し合うことを大事にしています。

**事務局**

A. 成長の場所

いずみだ　あや
**泉田　彩さん**
川崎町在住。小野寺さんと一緒にハンドメイド作家「よこまち」としても活躍中。活動するときに大切なのは、出会いとつながりに感謝すること。

たちが集まれる場所をつくりたい」という想いに共感して集まったメンバーらは、これからも自分たちのペースで活動しながら地元に元気を届け続けます。

## - Photo gallery -

**ロゴマーク**

かわマルメンバーが描かれたマーク。メンバーの一員である「お絵描き屋mio.」さんがデザインしました。

**かわマルのお供**

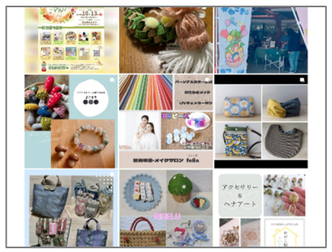
これを見たら「かわマルだ！」と思ってもらえるよう願いを込め、令和５年度元気な地域づくり事業で制作したのぼりです。

**第１回かわマルの様子**

令和５年６月、コロナ禍を経て開催したかわマル。景品が貰えるスタンプラリーを企画するなど、工夫を凝らしました。

**活動を広めるために**

情報発信にも力を入れており、チラシの周知だけではなくインスタグラムも活用。出店者の紹介も充実させています。



# 「守るべきもの」を模索しながら

## 花泉 中神自治会

中神集落は一関市の合併の際、規約を改めて整備する必要があり、当時推奨されていた規約例を参考に自治会化。ただ、全戸で30戸に満たない小規模集落のため、部会制などではなく、6人の役員による担当制（福祉、体育、防災）にしました。

同自治会はかつて3班体制でしたが、築堤による移転などを経て2班体制へ。今でも回覧板等は2つの経路で全戸に回していますが、現在は「班」という明確な括りを無くしています。また、以前まで班毎に役員を選出していたやり方も、家の並びで「この家からこの家まで」と6戸を決め（2年毎の輪番）、その中で各種役員を振り分ける形へと変化していきました。

自治会副会長の菅原憲行さんは「班がない方が、以前よりまとまって話をするかも。輪番制の役員も、隣近所同士だからやりやすいし、大変さをみんなで分かち合っている感じ」と、現在の仕組みが同自治会に馴染んでいる様子を語ります。

**中神自治会（日形）**
行政区は日形５区。27戸約70人が暮らす。自治会化しているが、会長、副会長、福祉担当、体育担当（２名）、防災担当の６人が役員として２年間、集落内外の各種役割を担う体制。

左の写真：中山間事業の草刈り後の集合写真（令和６年９月）

### 「班」を無くし、みんなで分かち合う

中神集落内にある「どうじゃ森遺跡」こと「中神遺跡」は、縄文中期から弥生前期にかけての土器等が多数採集された丘陵です。同遺跡は私有地であり、平成初頭に大規模な発掘調査が行われて以降、周辺住民は立ち入らなくなりましたが、集落住民にとっては「小さい頃みんなと行って、矢じりで弓矢を作り遊んでいた」と、思い出深い場所になっています。

舟運が活躍した時代、川港として栄えたのが七日町（藤沢町黄海）で、その対岸に位置する中神集落は商売人も移り住み、かつては道具屋や宿屋もあったとか。橋（当時はつり橋）を渡ればすぐに七日町なので、生活圏も日形側ではなく、黄海。そんな立地条件や、水害常襲地だったこともあり、「現在のような組織ができる前の祖父母の時代から、まとまりがあったらしい」と、自治会長の菅原一男さんは振り返ります。

### 「農業」は「共通の話題」「そこに暮らす意味」

同自治会の高齢化率は50％を超えていますが、その背景には、今の60代後半世代が家に残り、家で両親を見ている＝同居率が高いという地域性があります。そのため、各家や隣近所の「支え合い」がしっかり機能しており、移動販売車も来ることなどから、「のんびりと暮らすには大きな問題はない」と一男さん。しかし、転出した次の世代が故郷に戻ってくる見込みを尋ねると「戻ってくる動機がなくなってしまった」と、首を横に振ります。

日形地域は地域全体で基盤整備が行われ、平成25年に面工事が完了し、現在は担い手の方々が農地を耕作。農地は守られた反面、「基盤整備の時には活発に夢を語ったが、いざ仕組みが出来上がったら、勤めに出ているわけではない人にとっては、これまでの仕事を取り上げられた感じ。農業の話は『共通の話題』として日常のコミュニケーションの一つだったが、それがなくなってしまった」と、予想外の現実に直面。「戻ってきても役目がない以上、次の世代がここに戻ってくる意味が何なのか分からない」と、憲行さんは寂しい表情を見せ、息子が残っている一男さんも「同世代がいないと、地域にも出てきにくい」と今後への不安をのぞかせます。

### 次の一歩を踏み出すために

そうした現状から「『攻め』の事業ではない。『守り』の事業だけ」と苦笑いを見せる二人ですが、同集落では自治会発足前から様々な交流事業を行っていました。昭和39年開催の東京オリンピックをきっかけに、毎年10月10日に行っていたのが、集落総出の運動会。一反歩程の田んぼを会場に、万国旗を張り、女性陣は赤飯を作るなど、集落の一大イベントでした（同日に「瀬古利彦杯」が行われるようになり、廃止）。

その後、「世代間交流」として、集落全員でBBQや花火などを行っていた時期もありましたが、小学生がいなくなったことやコロナ禍も相まって、ここ数年、交流事業は年祝いも兼ねた新年会のみに。そこで、今年は代替事業として「秋祭り」を行う方向で検討しています。

築堤が最も遅かった集落であり、度重なる水害と闘いながら、住民のつながりを強めてきた同集落。「この地に住み続ける意味」が見出せないという現実に対し、かつて遊んだ遺跡の記憶や運動会のように、「秋祭り」が「共通の話題」「共通の思い出」となって何かしらのきっかけが見えてくるかもしれません。

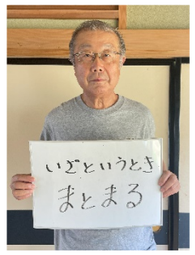
## Q.集落の自慢は何ですか？

### 自治会長

A. 和

すがわら　かずお
**菅原　一男さん**
１期１年目（役員は通算３巡目）。趣味は釣りですが、目の前の北上川ではなく「渓流釣り」が専門とのこと。

### 副会長




A. いざというとき まとまる

すがわら　のりゆき
**菅原　憲行さん**
1期1年目（役員は通算３巡目）。趣味は野菜づくりで、現在は中山間組織の事務局も兼務中。

## gallery - Photo

**急斜面との格闘**
中山間事業で行う圃場周辺の草刈りは、かなりハード。この日は13人が複数チームに分かれて作業を行いました。

**様々な出土品**
「どうじゃ森遺跡」から出土した遺物の一部が一関市日形市民センターに。カラフルな矢じりや土偶が目を引きます。

**なつかしの運動会**
万国旗の印象が強いという昭和時代の集落一大イベント。仮装も種目の一つで「仮装大賞」があったとか!?（昭和52年）

**月1回の「なごみ会」**
自治会とは別組織で運営されるサロンは第3木曜日に開催。8月には集落の若い人たちと一緒に料理教室を楽しみました。

今月のテーマ

地域運営の落とし穴 52

「多様性」「個人情報」意味を正しく理解する

# 博識杜のフクロウ博士

第68話

## 本当に‘守らなければいけないこと’は何か？

「多様性」という言葉を使って都合よく自分の権利を主張する人がいて、「使い方が違うのでは？」と気になることもしばしば。多様性と謳ってしまえば何でも許されるようなきらいがありますが、社会で「多様性」という言葉が採用された‘そもそもの背景’があるはずです。それを知らずに言葉だけを切り取って、自分にとって都合よく使い始めているのではないでしょうか？

多様性の尊重とは、‘異なる文化、信仰、人種、性別、性的指向、年齢、身体的能力、経済的背景など、人々が持つさまざまな側面を認識し、尊重すること’です。この‘多様性の尊重’が社会や組織においてアイディアや革新をもたらすため、大事な考え方とされています。協働に似ていて、我々がよく使う表現をすると**‘強みの掛け算’**でしょうか。異なる人を受け止めることは含まれていますが、個人の権利を主張するための考え方ではありませんね。

では、地域づくり分野、地域での暮らしに寄り添って考えてみましょう。総務省では、地域における多文化共生を「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと※」と定義しています。「好き・嫌い」「価値観」など個人によって相違があるのは当然のことであり、それを多様性という一言で片づけるのではなく、‘地域社会の構成員として一緒にいろいろな考え方を共有しながら、困ったことがあったら助け合うこと’が前提になっているようです。やはり、個人の権利を主張するための考え方ではありませんね。

このような事例は、多様性だけではなく、今でも話題になる「個人情報保護法」も同じことが言えるのではないかと感じます。「個人情報保護法」ができてからというもの、「名前を教えるのも個人情報なので」と言われることが多くなり、地域では住民把握に困ってコミュニケーションの希薄化を加速させました。同法は、インターネットの普及により個人の利益侵害の危険性が高まったことにより整備され、‘個人情報の悪用から守るためという背景’があり、地域住民とのコミュニケーションを避けるための法律ではありません。「コミュニケーションを取りたくないから」という理由から、「個人情報」という言葉を切り取って権利を主張するのは、どこかおかしい気がします。拒否する人からすると、悪用されるかもしれないという恐怖心があるのかもしれませんが、今は「使用目的」や「目的外使用の禁止」は、自治会レベルでも留意しています。

**‘法律や制度を盾にすれば自分にとって都合が悪いことは回避できる’と捉えている人がいるかもしれませんが、それは間違いです。**

普段の生活が平穏に送れるのであれば、地域との関わりを遮断しても困ることはないのでしょう。しかし、**有事の際に「助けてほしい」と思っても、関係が構築されていないようでは助けられません。困った時に支え合うため、自分や家族を守るためにも、住民同士のコミュニケーションは大事**なのです。

このことを知ってもらうため、「住民意識の向上を目的とした市民講座を開催しよう」となるのが一般的ですが、市民講座では参加する人が限られてしまいます。先にすべきことは、個人情報保護法や多様性などの**言葉の壁に直面している自治会役員や地域協働体(RMO)役員など、‘現場の人たちへ向けて研修や講話を行い理解を促すこと’**ではないでしょうか。特に輪番制が主になってきている役員では、「『知識や経験がないから』と役を受けることに抵抗がある人もいる」と聞きますし、あるワークショップにて「役員は、業務内容よりも、住民との向き合い方のフォローアップの方が優先順位が高い」という声も聞きました。

**役員クラスが言葉の正しい意味を理解し**、例えば住民から「個人情報ですから教えられません」と言われても、**正しく対応できる状態をつくる**ことが、役員の負担軽減の一助となるはずです。

※　総務省「多文化共生の推進に関する研究会報告書～地域における多文化共生の推進に向けて～(平成18年３月)」より

中野民区(一関市山目)の見守り事業では、個人宅が分からない民生委員が、区長と班長に同行してもらいながら訪問していました。地域の安全のために地区内の高齢者宅を訪問し、地道にコミュニケーションを築いている地域も多いようです。





企業紹介

# 一関　有限会社　光成工業

効率よく物を運搬・保管するためのパレット(倉庫用、災害復興関連、自動車関連等)を中心に製造を行う。金属・板金加工、溶接、塗装、組立まで一貫した生産が可能。昭和48年、初代代表取締役が「有限会社鈴忠(神奈川県横浜市)」の岩手工場(プレス加工部門)を平泉町内に設立、昭和50年に岩手工場を本社として「有限会社東北機工」へ社名を変更、同社の前身となる。昭和54年、社名を現在の「有限会社光成工業」へ変更したのち、市内や隣町に工場を増設、地元企業として安定した雇用を生み出す。

## 「縦の糸」と「横の糸」で人材育成

### 故郷を思い「地元で働く場」が誕生

「金の卵世代(団塊の世代)である父は一関市出身で、若くして関東に起業(昭和37年)しました。高度経済成長期も相まって、集団就職や農閑期の出稼ぎなどの労働力は貴重な存在であり、『地元の人が関東で起業した』ということを知った同郷者が、父を頼りに上京したと聞いています」と語るのは、有限会社光成工業の代表取締役(二代目)村上耕一さんです。

村上さんの父は一関市からの出稼ぎ者を受け入れる中で、「地元に同じような工場があれば働きたいか？」と従業員に問いかけたところ、「地元で働けるのならば、なお嬉しい。故郷にもこういう工場があればいいな」との反応があり、その声を受けた形でUターン。昭和48年にプレス加工を主体とする工場を平泉町に設立、昭和50年に本社とします。

昭和63年、一関市萩荘(現住所)に本社工場を移転すると、それまで培ってきた金属加工や溶接の技術を活かし、当時流行したカラオケボックスの国内唯一製造も手掛け全国に流通を開始、以後ハウス事業部を設け、各メーカーに対応したユニットハウスの製造にも着手します。

現在の従業員数は約１００人で、平均年齢は40代前半。中には親子二代に渡って従事している人もいて、技術の継承だけではなく、先代の「地元に働く場を」という意思も一緒に受け継がれています。

### 環境を充実させ人と人の繋がりを強化

同社は、普段の仕事(＝生産活動)のほかに、従業員有志らで組織する「グループ活動」があり、入社半年を経過すると誰でも参加することが可能です。

グループ活動のテーマは、「安全衛生」「環境整備」「親睦」「ものづくり」「ブランディング」の５つ。チャレンジしたい事などがあれば各グループの検討会議を経て、その計画を社内で諮り、同社の補助を受け事業を展開することができます。

「グループ活動の企画や運営などで、チームを作ったり成功体験を積むことは、結果として生産活動の充実にもつながる」と村上さんは考えており、「生産活動を『縦の糸』とするならば、グループ活動は『横の糸』。従業員同士のコミュニケーションが強化されることで、社内全体に大きな成果をもたらしています」と語ります。

また、同社では、「未来を担う子どもたちがモノづくりを知るきっかけになりたい」という想いから、市内中学校への出前授業や小・中・高校生を対象とした工場見学の受け入れ、子ども溶接教室なども開催しています。

今後について、「一関市外の若者も採用したり、この地域に住み続ける人を増やしたいです。一度、市外や県外に進学した地元の若者たちが、戻って来たくなるような雇用の場を作っていきたいですね」と語る村上さん。次世代の明るい未来に繋げるため、地元の雇用を守り継いでいきます。

1　代表取締役の村上耕一さん。

2　自社製造のボックスパレットや棚。

3　ハウス事業部によるユニットハウスの組立。

DATA

〒 021-0902
一関市萩荘字霜後241
TEL　0191-24-3211
FAX　0191-24-3335
HP　http://www.kohsei-l.co.jp

地域の‘気になること’をセンタースタッフが独自に調査！

ミッション90

## くらし調査ファイルNo.27　「俚謡（餅つき唄）」

その土地の風土や生活を連想させる「俚謡（里謡）」は、婚礼等で唄われる「祝い唄」や、木挽きや酒造り等で唄われる「労働唄」など、古くから庶民の間で口伝されてきました。近年はあまり耳にしない「俚謡」ですが、もち食文化が残る当市域では、餅つきをする際に「餅つき唄」を唄うため、現代でも「俚謡」が継承されています。先人がどんな思いを込めて「餅つき唄」を唄ってきたのか、その歌詞には地域性があるのか調査してみました。※記載内容はあくまでも当センター独自調査の結果です。

### ■俚謡とは？

その土地の人々の間で唄い伝えられた唄は、里謡・地唄・俚歌・俚曲など様々な形で文献等に記載されますが、正確には**「俚謡」**と呼ばれ、地方から人々の集まる都市部で唄われる、都歌・今様・俗謡などに対して、特に田舎の狭い地域で口伝される歌詞が特徴です。

「俚謡」の種類としては、**田植唄・籾摺唄・餅つき唄・酒屋唄・茶作り唄・奉納唄・祝い唄**などがありますが、その唄は「誰がつくり、いつごろから広まったのか」については不明点も多くあります。また、同じ地域内においても、唄う人や集落によって節回しや歌詞が微妙に異なるものが多いのも「俚謡」の特徴です。

### ■俚謡と民謡は違うの？

明治中期には民俗学的に「民謡」という新語で訳され、大正時代以降「民謡」という呼び方が普及していきますが、戦前はまだ**「民謡」より**も**「俚謡」と呼ぶのが一般的**でした。

戦後からは、里謡・俚謡・里唄という言葉が田舎を連想させ「差別的に感じさせる」という理由で放送関係では「民謡」と表現するようになり、地方でも「俚謡」と呼ぶ人が少なくなっていきました。現在は、全国的に俚謡のことを「民謡」と総称しています。

### ■一関市の俚謡

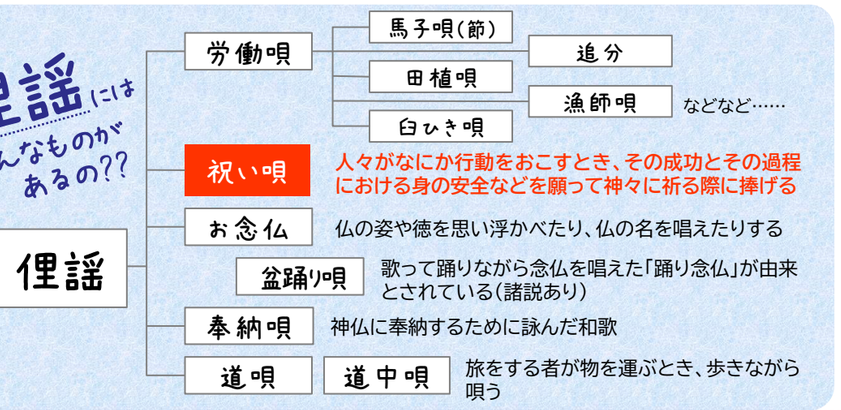
市内各地域の文献をもとに、古くから伝わる「唄」が何かを探ると、**地固め唄・麦打ち唄・田植唄・馬方節・餅つき唄**など様々な種類があることがわかりましたが、時代とともに唄う人が少なくなったようです。

そこで、市内の20～90代の男女47名を対象に、地域や集落に継承されている「唄」があるかどうかヒアリング調査をしたところ、「餅つき唄がある」「餅つき唄の歌詞を知っている」と答えた人がそれぞれ23名と、**約半数の人が「餅つき唄」を認知している**ことがわかりました。その背景は、**一関市が「もち食文化」のまちであること**や、現在は**「餅つき隊」などの組織を結成し集落・地域・市が主催するイベントにおいても餅つき唄が披露されている**ことなどが考えられます。

当市域で継承されている「餅つき唄」は、杵（棒状の千本杵）と臼で餅をつくときに一緒に唄われていた唄です。完成した餅はその場で振舞うことが多く、平成中期頃までの婚礼行事※（結婚式や嫁入りの行列など）にも欠かせない「祝い唄」の一つでした。※不祝儀の際も餅はつくが、唄は唄わない。

しかし、同じ「餅つきをするときの唄」なのにも関わらず、**地域によってその歌詞や節回しに違いがあることも判明した**のです。

それでは、当市にはどんな餅つき唄があり、その歌詞にどんな特徴があるのか……!?左頁で詳しく紹介していきます。






# 一関市内で唄われる「餅つき唄」の特徴

当センターがヒアリング調査した結果、市内で継承されてきた「餅つき唄」は大きく分けて、**『南部餅つき唄』『県南餅つき唄』『気仙坂』から生じた餅つき唄（旧東磐井を中心に継承）の３種類**に分かれるようです。その中でも、**旧東磐井で伝わる餅つき唄**には特徴的な歌詞があり、深掘りしてみました。※地域の方言により歌詞に若干の違いがあります。

### 旧東磐井郡を中心として継承『気仙坂』から生じた餅つき唄

ソレツキ　ヤレツキ　めでたい　めでたい
もちつきは　楽だとみせて　さー楽じゃない
たのみます　杵さきあげて　さーなかたのむ
よめごきた　小豆鍋かけて　さー塩入れる
塩入れて　嫁ごに食わせ　さー抱いて寝ろ
抱いて寝て　寝肌が良けりゃ　さーまたござれ
明日朝の　夜明けの金の　さーなるまでも
ねばりよい　男子の　さーできる餅
つけた餅　いつまでついて　さーなぐさめる
うたいましょ　舞いましょ　若さ　さー二度とない
呼べば来る　呼ばねば来ない　さーせきの水
ゆうべまでの　しのんだ裏の　さー細道を
今朝見れば　七重垣を　サー結ばれた
結わば結え　七重も八重も　さー九重も
音に聞く　黄海の宿の　さー七日町
気仙坂　七坂八坂　さー九坂
十坂目に　かんなをかけて　サーたいらめた
それは嘘　人足かけて　さーたいらめた
あんびゃあいい　あんびゃあいい

※歌詞は「東山郷福餅つき隊 当誌2024年7月号参照」より。

▲節は、民謡の『気仙坂』から生じたもので、かつて気仙大工が唄っていた木遣り（きやり）唄（＝労働唄）の一種が変化したのではないかと推測。嫁入り行列を迎える喜びと、その後の子孫繁栄を願う歌詞には方言を交えています。

▲東日本大震災後、支援として出前餅つきを実施する「東山郷福餅つき隊」の様子

### 旧一関市・旧花泉町などに多い 県南餅つき唄

ハァー　唄いましょうや
舞いましょう
若さ二度ない　二度はうそや
一度は咲いて　実がなるや
ハァー　一関や　台から
見れば長い町　長けれどや
一夜の宿を　取りかねた

※1番と3番歌詞

→一関民謡保存会の仲間数人と共に平成6年結成された、祝い餅つき振舞隊が継承している餅つき唄。

### 南部餅つき唄

奥州サーハェー
（ハーエヤコラ　エヤコラ　ハイハイ）
奥州南部の大畑なれや
出船入船　繁華の港
陸は豊年　瑞穂の宝

※冒頭部分

→青森県八戸市で発祥した労働唄。大正時代には岩手県北部でも盛んに唄われるようになりました。

**藤沢町黄海には七日町という集落があるため、「旧東磐井郡で継承されている餅つき唄のヒントが黄海にあるのでは？」と考え、餅つき唄を調査していくと……**

## 同じ旧東磐井郡内なのに歌詞が違うことが判明

### 黄海民謡舞踊愛好会が継承している餅つき唄

音にきくや　黄海の　宿の七日町
前は川や　後ろは　繁る小松山
ハアーソレツケ　ソレツケ　ソレツケ　ソレツケ
松の葉のや　色こそ　変わる落葉こそ
落ちたとてや　お前の　世話にゃなりやせぬ
ハアーソレツケ　ソレツケ　ソレツケ　ソレツケ
雨が降るや　船場さ　笠を忘れたや
笠も笠や　お江戸で　はやる誉の笠
ハアーソレツケ　ソレツケ　ソレツケ　ソレツケ
気仙坂や　七坂　八坂九の坂
十坂目にや　かんなを　かけた如くだよ
それはうそや　ご人足　かけて平らめた
ハアーソレツケ　ソレツケ　ソレツケ　ソレツケ
つけた餅や　いつまで　ついてなぐさめる
あすのさのや　夜明けの　鐘のなるまでも
ハアーソレツケ　ソレツケ　ソレツケ　ソレツケ

◀2023年11月開催の収穫感謝の会の様子（提供：一関市立黄海小学校より）

### 臼と杵の縁起

餅つきをする臼と杵の形はそれぞれ女性と男性を表し、子孫繁栄、家の繁栄の象徴として、各家庭で大切にされてきました。

聞いてみよう♪

### 市内で継承される餅つき唄

| 祝い餅つき振舞隊 | 東山郷福餅つき隊 | 黄海民謡舞踊愛好会 |
|---|---|---|

その他の餅つき唄はHPから聴けます！

### 黄海民謡舞踊愛好会 代表 佐川公郎さんに取材！

佐川さん（96歳）によれば、**歌詞に出てくる「七日町」**について、「かつて北上川を利用した舟運の舟着場があった七日町は、石巻（市・港）から来る人や物で賑わいを見せ、沿岸部からお嫁に来る人も多かった。その方々の迎入れや思い出話が歌詞として残ったのではないか？」と予想します。

また、黄海村（当時）に着いた物資や人が室根や大東を通り、本吉や陸前高田方面にも運ばれていたことから、**「起点であった『黄海の宿　七日町』が道中唄となり、それが広がって祝い唄として餅つき唄にも出てくるのではないか？」**とのことでした。

さらに、婚礼で行われる餅つきに関して、旧東磐井郡で継承される「餅つき唄」には全体を通したストーリー性はほぼ無く、あちこちの民謡や、祝事の連想から「縁起の良さそうな言葉を集めているような感じなのでは？」と続け、地域や集落、またはそのときの雰囲気で、餅つき唄も変化（アレンジ）しているのでは？」と佐川さん。「昔の婚礼は喜びを集落や家全体で分かち合うことが前提。たとえ歌詞を間違えてもにこやかに流して唄い、餅をついたものだ」と懐かしみます。

実際、「当時は七日町に多くの宿や酒場があり、賑わいを見せていた」と文献にも掲載されており、沿岸部の人々との交流など、展開される泣きも喜びも人間模様が想像できますね。そんな物語が山越えをしながら口伝され、いつしか子孫繁栄を意味する唄となり「餅つき唄」に変化したのかもしれません。

〈協力〉祝い餅つき振舞隊（一関）／要害平餅つき隊（花泉町）／東山郷福餅つき隊（大東町）／入山沢餅つき隊（千厩町）／黄海民謡舞踊愛好会（藤沢町）／後藤定幸さん（花泉町）／伊藤力さん（川崎町）／藤原利彦さん（室根町）／佐川公郎さん（藤沢町）／その他　市内のみなさん
※参考文献等は当センターホームページに記載しています。ご了承ください。